書　評

潘光哲『晩清士人的西学閲読史（1833～1898）』
（中央研究院近代史研究所、2014 年）

田　荊

1. はじめに

今までの清末史における西洋の学術の受容への関心は、思想史の分野に集まっていたが、本書は 1833 年から 1898 年にかけて、一般的な知識人の読書生活を研究対象とし、清末中国知識人の西洋の学術の受容と、その変遷に焦点を絞る「読書史」（「閲読史」）の意欲作である。本書は「知のデータベース」（「知識倉庫」stock of knowledge）という概念に注目し、その形成と発展過程を丹念に描き出した。なお本書は著者が十年あまりに蓄積した研究成果を基にして書かれたものであるが、出版の際、大幅な加筆と修正を行っている。

2. 本書の概要

本書の構成は以下のとおり。自序/第一章　導論/第二章　「知識倉庫」的建立与読書世界的変化/第三章　朱一新的読書世界与「地理想像」的知識基礎/第四章　「西学」的「新聞化」：『時務報』与他的読者/第五章　「西学」的体制空間：『沅湘通藝錄』為中心/第六章　「読書秩序」和「知識倉庫」的活用転易/第七章　結論/付録

第一章では、「清末中国知識人の思想世界は、どのように時代の変化と向き合ったかという問題を究明しようとすれば、彼らの読書活動と思想・観念の変遷の間に見られる相互作用をより明確に描き出す作業が必要である」（5 頁）と本書の課題を提起した。著者はこの課題の解明を知のデータベースの形成と展開過程の究明に求め、本書の主要な分析課題とした。知のデータベースという概念は社会学者であるシュッツが用いたものであるが、著者はその概念を清末中国知識人の読書活動と「西学」受容過程の研究に適用し、具体的

には西洋の学術と情報とに関わる書籍や雑誌から得られた知識を指す。これらは西洋人や日本人から伝えられてきたり、中国知識人自身が受容した知識や情報を再生産したりするなかで、さまざまな様態で蓄積されてきた。

本書の特徴の一つは、読書史という研究方法を用いたことである。読書史の研究方法といえば、だれが、いつ、どこで、何をいかに読んでいるのか、なぜ読むのかという問題を究明する方法である（13 頁）。さらに、書籍の執筆、出版、印刷、流通と消費等物理的条件・経済面の制約を清末中国知識人の読書史の研究対象としたのは､本書の特徴的な視点であるといえるだろう。

現代の思想と観点で先入感を持ち、歴史上の人々の思想を評価することが従来の研究史の欠点である。中国自身の視点で理解し、清末知識人の読書行為を当時のコンテクストに置き見直すことで、清末中国知識人の読書史をより明確に描き出せるのではないだろうか。読書史の研究方法を採用する所以である。こうした研究関心は既存の分析アプローチと異なる部分が多く、著者は読書史の先行研究を整理し、その研究方法を中国清末史で使ううえでの適用性と限界を厳密に説明した。史料の制約などのため、一部分の読者（例えば、女性と庶民）は文字の記録を残しておらず、中国の読書史では、その全体像を描き出せない。本書の研究対象は一般の知識人までに限定し、個別研究にこだわり、研究成果の精度を追求する。

西洋宣教師の来華により、近代西洋の学術と情報が清末中国で広がる。著者は 1833 年に広州で発刊された中国国内で最初の近代的意義を持つ宣教師による『東西洋毎月統記伝』の創刊を知のデータベースの形成の始まりとする。その後、中国知識人自身、さらに日本人も含め、知のデータベースは次第に充実していく。だが 1898 年から、知のデータベースの形成は、日本を経由して西洋の学術を学ぶことへと変わり、それは知のデータベースの形成史における転換点だと著者は認識している。以上の原因で、本書の考察対象時代を 1833 年から 1898 年までに限定する。

中国と西洋の関係と関わる課題を主軸とし、時代の変化に直面し、清末中国知識人が「世界知識」を求める過程でいかに各種の西学の書籍を読み、知識と情報を受け容れ、国際情勢を知り、知見を広めるのかをについて、明確に叙述することが本書の目的である（17 頁）。

第二章においては、知のデータベースの初歩的な形成の状況を具体的な事例を通じて描き出す。まず、中国知識人に大きな影響を及ぼした西洋宣教師の事例である。彼らの宣教行為は禁止されたが、彼らは西洋の学術と情報を宣伝する間接的な方法を取り、中国で伝道を続けた。西洋宣教師が創刊した新聞、書いた書籍は伝道の内容を含んでいるけれども、西洋文明の宣伝にも多くの役割を果たし、深遠な影響を与えた。

それだけでなく中国知識人も自分たちの努力で、西洋宣教師が基礎を作った知のデータベースを発展させた。1830 年代末から 1840 年代、中国知識人にとって「世界知識」を求めることが目標となった。代表的な人物は魏源、梁廷枏、徐継畬と梁啓超等である。彼らは宣教師達が宣伝した知識を活用して、自分の書籍に収録したり、西洋の書籍を翻訳したり、新聞を創刊したりする。彼らの成果はまた、知のデータベースの一部となる。

康有為はこの階段で、外国の議会制度を一定の程度で理解したが、その制度の実際の稼働に対する期待も、心配点もともに描き出した。既存の知のデータベースの知識は、知識人たちの需要を完全に満たすことができなくて、知識人はより高いレベルの西洋の学術を求めた。知識人たちは知のデータベースの形成に貢献したいけれども、実際にやると、さまざまな困難にあった。

岡本監補の『万国史記』は知のデータベースの形成に原動力を提供し、多くの知識人に活用され、共有される為、清末読書界の人々に高く評価された。著者は知識人が当該書をどんなふうに理解するのかを実証した。

書籍と新聞の印刷、流通と関わる書目の地理学（「書本地理学」geography of the book）も、知識人の読書世界と切り離せない。著者は郵送事業の未発達のため、書籍の価格は地域の差が存在したり、経済面の制約を受けたりする事情を提示した。

第三章は今まで十分に研究されなかった朱一新と彼の著書『無邪堂答問』を取り上げ、朱一新の読書世界を整理し、彼の読書経験は如何なる地理学知識の研究活動に役立ったのか、無限の思想空間で「地理想像」を如何に展開させたのか、という問題を検討し、清末知識人の読書生活を新たな視角から活き活きと描き出した。従来、「伝統派」のレッテルを貼られていた朱一新だが、『申報』と『西国近事彙編』から得た情報で「請速定大計以搘危局疏」を

書き、1880 年代清朝の中層官僚がもつ世界情勢に対する新たな理解を示したのである。民族の空間意識（「地理想像」）の影響で、当時の清朝のエリートは清朝の国境の安全が脅かされるという危機意識を持つに至ったといえる。

中国の伝統的な考証学は正史を証拠として使っていたが、朱一新の時代は西洋の地理知識の記述を引用し参照しながら、正史の誤りを直すというやり方が学界で認められた。伝統的な地理知識が調整すべき、深めるべきものになったと著者は述べている。朱一新が辺境と外国と関わる書籍に取り組む目的は、民族と国家の安全が脅かされる時、侵入した敵の誤りと悪意を証明できる各種の根拠を探り、敵を批判し、民族のアイデンティティーと中国の伝統的な政治体制（「国族伝統」）の正当性を守ることだったのである。さらに、異端邪説を批判し、三綱五常を基礎とする論拠とするためであった（146 頁）。

第四章では、当時の近代的なマスコミの中で重要な地位を占めている『時務報』に焦点を当て、知のデータベースの発展過程で興味深い西洋の学術のニュース化という段階を論じる。新聞等のマスコミを発展させることは当時の知識人が合意したことであり、西方のニュースと学術を翻訳することは、敵と見なされる西洋の状況を知る手段の一つと認識された。そのため積極的な活動が行われたのである。

著者は『時務報』の読者の反応を分析し、読者がそれぞれの関心に応じて、『時務報』に載せられた内容から異なる理解を得たことを明らかにした。さらに人々が外部の情勢と自己の位置に対してもつ認識、対策と行動はともに、さまざまな様態を呈することを指摘した。著者は『時務報』の関係者の人的ネットワークのさまざまな様態を描くことを通じ、読書に基づき構成された読者グループの具体的なイメージを描いた。また『時務報』は中国知識人が共有する「公共空間」であると指摘している。著者は『時務報』の読者と編集者に注目し、両者のやりとりは新聞が知のデータベースを充実する重要な原動力の一つを体現している実例であるとした。

『時務報』に掲載された記事とニュースは、編集者や翻訳者の関心を反映している。その一方で取材元からの制約を受ける。ニュースの主題から見れば、『時務報』はいつも外の世界の目（「異域之眼」）で中国自身を反省するとともに、独特の関心を強く表していた。技術の制限で、新聞のニュースは絶

対「新しい」ものではないが、定期的にニュースを提供するマスコミである『時務報』は、読者が国際情勢に注目するようにさせ、民族の空間意識を深めさせ、さらに古い観念の変更と発展を促す。新聞と接触した知識人たちの伝統的な経世思想の範囲が広がっていき、さらに時代と連動し、現実の需要に応じ、変わっていくことを示した。

『時務報』の創刊と成長は読者が世界情勢の変化を把握する入門の鍵となり、知のデータベースの重要な構成部分である。しかし、『時務報』の翻訳記事は、「世界知識」の生産過程が外部の文化環境によらない事実をも具体に明らかにした。翻訳者が外国の記事を翻訳する時、中国自身の文化文脈で外国の知識を解析し、読者がイメージしやすい概念を使用する。マスコミは読者に自身の民族アイデンティティーを形成する原動力を提供できる。

第五章は1890年代、江標が学政を担当している湖南省の状況を中心にし、西洋の学術という新しい要素が伝統科挙試験に登場することに注目する。著者は西洋の学術という新しい要素がどのように伝統的科挙体制に導入されるのか、さらにその新要素の導入により、知のデータベースがどのように変化していくのか等の科挙改革と知のデータベースの変遷の問題を検討する。

江標は既存の科挙制度下、王韜、王之春、譚嗣同等のアドバイスを活用しながら、自分の工夫をいれ、科挙制度の改革を行っている。江標は伝統的な科挙に西洋の学術と情報に関わる試験問題をいれ、知識人たちの読書の方向を伝統的な中国の経典から西洋関連知識に導引したのである。江標が出した試験問題は知のデータベースの内容を熟知していれば、うまく対応できるけれども、その内容を如何に活用するのかという点では、個々の知識人により、異なる回答が出た。そこで江標は受験生の優れた文章を『沅湘通藝錄』に収めたが，本書で興味深いのは『沅湘通藝錄』という史料を研究し、知識人たちが出世する前の段階で西洋の学術を受容するさまざまの様子を分析したことであろう。

知のデータベースを充実するとともに、「文化市場」も拡大していき、知識人だけではなく、出版社とその関係者も「文化市場」から利益を得られる。受験対策として人気のある西洋書籍と新聞は縮刷版と海賊版も現れるほど、書籍の販売市場は活発になった。

第六章は 1897 年 12 月から湖南省の学政に任ぜられ、江標の後任者となった徐仁鋳が湖南省で行った科挙改革の状況を考察する。徐の教育方針とは中国の伝統経典に執着しないことと、西洋の学術に関する書籍に接触して西洋の学術を完全に理解できるように知識人に勧めるというものであった。梁啓超の『西学書目表』は有識者に西学の書籍をどういう順番で読めば、早く理解できるのかを提示した書籍である。梁啓超はこのような西洋の書籍を読むコツを教える書籍を編纂することを通して、独特な読書の秩序(「読書秩序」)を形成させた。徐仁鋳は梁啓超が主張する読書の秩序を支持し、積極的に湖南省の知識人たちに紹介した。

徐仁鋳は江標の試験問題を参考としたうえで自分なりの考えも加え、一定の範囲に限定せず、定型のルールに従わない科挙試験の問題を出題した。そのため受験生は中国の伝統古典に精通していることだけでは足りなくて、不断に蓄積された西洋の学術に頼らざるをえない。さらに「文化市場」の最新動向をしっかりと把握できることも要求された。

蔡元培の翻訳したドイツの『論理学原理』と梁啓超の翻訳作『国家論』は、日本語版を参照しながら翻訳されたものであったが、著者はこのことを例として、1830 年代から形成されていた知のデータベースが崩れざるをえなくなった状況を説明した。日本を経由して伝われてきた西洋の学術や情報と関わる書籍や雑誌は、知識人の読書世界に新しい原動力を提供したのである。20 世紀に入り、以前の知のデータベースは時代の変化に応じなくなり崩れたが、「東学」(日本の学術) を利用し新しい知のデータベースが立ち上がった。

第七章では、知のデータベースの形成と発展過程を分析した本書の知見を読書史の観点から整理している。そして著者は歴史研究者が自分の先入観をもち、自分が設定した問題意識にしたがって史料を使う研究方法では、思想の変遷を全体的に理解することはできないだろうと批判した。すなわち近代中国の歴史変遷の文脈でいえば、西洋の学術に関する読書の歴史は当時の時代の背景とは切り離せず、研究者は自分の研究を当時の歴史的な文脈におき、思想変遷の全体像をより綿密に描くべきだと指摘している。

著者はアメリカの文化人類学者クリフォード・ギアーツの人間は自らが紡ぎだした意味の網の目に支えられた動物であり、文化をこの網として捉える

という概念を参照している。本書は清末知識人たちが時代の変化に応じて、民族や自分自身の未来を考え、日常の読書を実践し努力したこと等を様々な角度から明らかにしたが、著者はその分析を通じて彼らの個人の生命の意義を探し、彼らの意味の網の目＝文化を追求できると述べた。

付録では『時務報』の訳文が各種の『経世文典』から採録されたことを実証したが、これは著者独自の発見である。

3. 本書が拓いた地平と問題点

まず、本書の学界に対する最大の貢献は清末知識人の西洋受容史の変遷を、知のデータベースの形成、発展と転換、さらに読書史という独自な視角で分析したことであろう。

前述のように、本書は読書史という視点をとり、さまざまの側面から総合的な研究を行った。本や雑誌に掲載された文章の内容、執筆者と読者の関係に関する研究だけではなく、知識人の読書行為そのものを対象とし、西洋の書籍の流通の状況、販売価格の地域差、科挙受験対策書の市場の活性化、さらにその内的な連動まで詳細な事例研究を行い、その全体像を生き生きと描き出した。著者が知のデータベースという枠組みを築くことに力を注ぎ、その形成、発展、転換の全体の流れを具体的に地道に検証している姿勢は高く評価するに値する。また著者は知のデータベースにおける中国の知識人が書いた西洋に関わる文章と、その藍本になった西洋の書籍の原文を比較することで、立体的な比較分析を行った。これは本書が清末知識人の西洋受容史にとどまらない、本格的な読書史としての視野を持つことを証左している。

これまでの研究は清末における西洋の学術の伝播について、膨大な研究成果を蓄積した[1]。それらの研究の多くは、思想界の頂点にいる一部の思想家しか研究対象にしなかった。それに対して「民衆」史を対象にする研究も少なくない。だが、著者は朱一新、江標、徐仁鋳のような人物を取り上げ、頂点にいる思想家と一般的な民衆の間の、いわば「中等」に位置する地方エリートに注目し、そのことによって中国の思想界及び社会の全体像を新たに描くことに成功した。

従来、新聞や雑誌即ち、発信側を分析対象とする研究は多かったが、受信

側の読者についての研究は、史料的な限界のため研究が不足していた。本書の『時務報』に対する研究は、読者＝受信者を分析対象にした点で特徴的である。清末から発刊された雑誌や新聞が売上や発行部数などのデータを残すのは珍しいので、新聞の影響力を検討することは極めて難しいが、本書では読者が新聞から受容した知識の結果及び受容の過程に関して検討する事によって、新聞自体の影響力について説得力のある説明をおこなった。同時に読者が新聞をどのように受容したのかという問題についても明らかにした。

以下、評者なりに本書の留意点・疑問点をあげることで書評を閉じたい。

第一に、小野泰教と徐桂貴の両氏は、本書に対する書評で著者が 1898 年を分岐点としたことを認めなかった[2]。従来の西洋の学術を中心とした古い知のデータベースが、日本の要素を加えたため、新しい知のデータベースへと転換したとする点である。徐はその知識や情報の由来は、依然として西洋ではないかと批判した。小野氏はさらに「知識倉庫が士人たちに影響を与えるという枠組み自体は変わらなかったと捉え、該当時期の思想世界について転換を強調しがちであった先行研究に対し、むしろ連続性を主張することはできないであろうか」と指摘した[3]。

こうした小野氏と徐氏の見解に対して、評者の考えを述べれば、新旧の知のデータベースにおいて、中国知識人が学びたいのは西洋の学術と情報であることは誰しもが認めることであるが、日本経由の西洋の学術と情報には、多かれ少なかれ日本人なりの思考が込められている。翻訳が完全に原文の全体を反映できないという問題は、その一側面である。テキストの解釈には非常に個人差があり、日本語の翻訳が原文とズレている事例も少なくない。だから、著者が本書で主張している古い知のデータベースの一貫性、および古い知のデータベースと新しい知のデータベースの転換点を提示することは本書の議論の展開から見れば、ごく合理的な論述である。

第二に、小野氏は知のデータベースの全体像に対して、「従来の西学東漸史研究では必ず取り上げられていた厳復について、本書では意外なほど言及されていない」と指摘したが、評者も同感である。評者はさらに香港が西学東漸史の重要な舞台であるにもかかわらず、本書では全然言及されなかった点を指摘したい。本書が取り上げる時期、香港では西洋と関わる書籍が流通し、

雑誌の発刊も活発である。香港はイギリスの植民地であるという地理的優位さと政治環境を利用し、知のデータベースの形成と発展に大きな影響を及ぼしたのである。今後はこの点の分析も必要であろう。

第三に、本書では政府の西洋書籍の流通に対する弾圧についても言及があるが、より詳細な実証が加われば、知のデータベースが当時の政治環境の中でどういう存在か、どう発展していくのかに対して、その全体像をもっと理解することが可能だと思われる。本書の第五、六章では、科挙試験の制度の下での西洋書籍の流通と利用の可能性について詳細な論証が行われた。しかし政府の側、特に清朝の中央の指導層や地方の長官たちが、西洋の書籍に対し、どういう態度をとっていたのか、彼らが知のデータベースの形成と発展に対して、如何なる役割を果たしていたのかについての分析は、残された興味深い検討課題だと思われる。

第四、評者は知のデータベースが 1898 年に転換をとげたことは認めているが、その転換を促した契機と経緯についての著者の説明は不十分だと感じている。知識人たちが日本に注目した理由についての説明も曖昧だと思う。本書では、蔡元培と梁啓超の事例があげられたが、知識人全体がどういう契機で日本を注目していくのか、古い知のデータベースが、なぜ、知識人たちの需要を満たせなくなったのかという問題点について、より詳細な論証が必要だと思われる。あるいは知識人たちが日本に注目する経緯は、新しい知のデータベースの形成の背景としてあつかってもよいので、著者はこの点を本書では触れなかったのだろうか。

以上のようにいくつか不足点・疑問点はあるものの、本書で展開される個別分析は清末知識人の思想変遷を試みる研究者にとっては大いに参考になる。本書は中国読書史研究に大いに貢献していることは間違いない。本書が多くの研究者及び関係者に活用されることを祈っている。

---

[1] 清末における西洋の学術の受容については、熊月之『西学東漸与晩清社会』（中国人民大学出版社、2011 年）を参照。

[2] 小野泰教「書評 潘光哲『晩清士人的西学閲読史(1833-1898)』」（『社会と

文化』、第 31 期、2016 年)、徐桂貴「潘光哲,《晚清士人的西學閱讀史(1833-1898)》」『中央研究院近代史研究所集刊』(第 89 期、2015 年)。

[3] 小野前掲書評、211 頁。